

# インド・ヨーロッパ古代の異類婚姻譚について

On Indo-European Ancient Tales of Marriage between Humans and Non-humans

小島 恵子

Keiko Kojima

古来、人間は、人間を取り巻く自然というものをどのように見、またどのようにこれと向き合ってきたのだろうか。言うまでもなく、人間も自然の一部である。しかしながら、おそらくは人間が言葉を獲得して以来、人間は自然そのものとして生きることに常に葛藤を抱えて生きてきた。カレン・アームストロングは、ネアンデルタール人の墳墓に既に死後の世界への信仰の跡が見られるところから次のように語っている。「人類はその草創期から他の動物とは一線を画す存在であった。その日常生活を超越してゆく思想を持つという点において。」<sup>①</sup>人類は「死」という自然の事象を、他の動物のように受容するのではなく、これを超越するために死後の人生という神話を紡ぎ出していったというのである。このような葛藤は、人間に人と動物との違いを認識させ、人と、自然の一部である動物とはどのように関係していくべきなのかを考えさせたのであろう。そして、世界各地で語り伝えられる異類婚姻譚もまたそういった思想から生まれたものと考えられる。

ここでは、インド、ギリシアの異類婚姻譚を中心に、そのあり方を見、考察していきたい。

インド古代のマハーバータは、西暦400年頃の成立と推定されるが、その原形はそれよりはるか以前に遡るといえる。ここには、多くの物語が記されているが、その中には異類婚と認められるものもある<sup>②</sup>。

## ① 蛙の奥方

パルクシットという名の王がいた。あるとき、森の池辺で美しい少女と出会い、恋に落ちて求婚した。すると、少女は自分に水を見せてはいけないという条件の下に求婚を受諾し二人は結婚した。二人はしばらく幸せに暮らし、水のない御苑を造らせてそこを散歩したりしていたが、あるとき、その御苑の奥に、小さな池をみつけておりて行ってしまう。すると王妃となっていた少女は池に跳びこんで沈み、上がってこなかった。王は彼女を捜して池を空にするが、池には蛙がいるばかりだった。王は蛙が王妃を殺したのだと思い、国中のすべての蛙を殺すように命じた。すると蛙の王が現われて、王妃となった少女は実は自分の娘のスショーバナデーであり、人

間の少女に化けて王を騙すのは彼女の悪い癖なのだと告白した。これを聞いても、王は王妃への恋情を断ち切れず、王妃を戻してほしいと頼み、父の蛙の王は娘をパルクシット王に返した。その後、二人の間には三人の息子が生まれたが、嘘つきな蛙の王女の子供だったため、まっとうな人生は送れなかったという。<sup>3)</sup>

蛙の王の娘が人の女に変化して人間の王と婚姻を結ぶという小話であるが、もともと動物の本体をもつものが、人間に変身して人と結婚し、人間の子を生むという話型は、日本やアジアの異類婚姻譚と共通する<sup>4)</sup>。ただ、異類としての正体が明らかにされた後も婚姻生活を送るという点、および生まれた子が、人間としては劣ったものを持っているという点でアジアの異類婚姻譚とは一線を画している。

また、インドには全く異なる異類婚の形があったらしい。これはアシユヴァメーダ（馬祭）と呼ばれる王の即位の際に行われる儀式に見られる。この儀式については、紀元前一二〇〇年頃を中心として成立したとされる『リグ・ヴェーダ讃歌』にすでに記述がある。

## ② 「インドのアシユヴァメーダ（馬祭）」

まず馬が選ばれて浄められる。それからその馬を北東の方角（神々にいたる道）に放ち、一年の間、自由に歩きまわらせる。王子たちが軍隊をひきつれてその後を追う。馬が他国の領土に入ると、軍隊はその国と戦争して征服する場合もある。もし敗戦して馬が他国に捕らえられれば、祭式を実行することができなくなり、もの笑いの種となる。一年後に馬をつれ帰り、それを殺し、第一王妃がその死骸とともに寝る。その後、

馬は切断され分配される。儀式は沐浴と、祭官たちへ報酬を給付することで完了する。<sup>5)</sup>

……勝利の賞に富む・神的出自の馬の勲業を、われらが祭祀の場において宣言せんとするとき。……直ぐなる背を持つ〔馬〕は神々の領土に向かいて。靈感に富む聖仙たちは彼に歓呼を送る。われらは〔彼を〕神々の豊けき牧場においてよき伴侶となせり。勝利の賞に富む〔馬〕は、いみじき牝牛の群、いみじき馬の群、息子たち、またすべてを養う富を、われらに捧げよ。アディティ（無垢の女神）はわれらに無罪をもたらせ。馬は供物に伴われて、われらに主権を勝ち得よ。

(1・162)

……人間が汝より受益し始むるや、そのとき植物を最も多く食らうもの〔馬〕は、〔植物界〕を目ざましたり。戦車は汝のあとに従い、駿馬よ、若人もまた。……(1・163)

〔リグ・ヴェーダ讃歌〕辻 直四郎訳 岩波文庫

ここでは、馬は、富の象徴（「いみじき牝牛の群、いみじき馬の群、息子たち、またすべてを養う富を、われらに捧げよ」）であり、植物界を活性化させるもの（「植物を最も多く食らうもの〔馬〕は、〔植物界〕を目ざましたり」）であり、軍事を司るもの（「戦車は汝のあとに従い、駿馬よ、若人もまた」）でもあった。このような馬と王妃は婚姻の儀式を行う。これによって、王と馬は王妃を通して結合することになり、馬の象徴する富や農耕や軍事の力は王権に付与されたのであろう。

これと類似するといわれる儀式が十二世紀のアイランドで行われていたという記録がある。

③ 「王の即位式」<sup>6)</sup>

12世紀の聖職者ギラルドウス・カンブレンシスは、当時のアイルランドに王の即位式での馬に関する奇妙な風習があったと伝えている(『アイルランド地誌』第3部25章「前代未聞の異常な、支配と王権の確認法」)

「アルスター北方の僻地ケネール・コイルの住民は、非常に野蛮で忌まわしい儀式によって王を即位させる慣習をもつ。人々が一か所に集まると白い牝馬が連れてこられる。即位する者……君主よりも獣、王よりも無法者……は皆の前で馬と獣のように性交する。それから馬は殺され、解体され煮られる。そして同じ汁でかの男の風呂が準備される。彼は風呂に入ると周りを取り巻いている人々とともに馬の肉を食べ、また風呂の肉汁を器も手も使わずに口をつけて飲む。このような邪悪だが慣習的な儀式が完了すると、彼の支配と王権は神聖化されるのである」

インドでは、馬は男性原理として扱われていたようだ(したがって王妃との儀式的婚姻が行われる)が、アイルランドでは、馬の女神エポナの信仰にもあらわれているように女性原理なのである。白い牝馬は、王の即位の儀式において王との婚姻をする。これは、インドの場合と同じく、馬の象徴する農耕や軍事の力を王権に与えるためなのだと考えられる。

インドのアシュヴァメダもアイルランドの王の即位式も、ともに実際の儀式であるから馬は人に変身したりはしない。もしも、これが神話や物語に取り入れられたとすれば、また異なる語り口で語られたことであろう。

ギリシア神話にも、多くの異類婚姻譚と考えられるものが伝えられている。しかし、その形は、日本、アジアのそれとは大きく異なっている。

④ ゼウスとエウローペー

彼女(エウローペー)をゼウスが恋して、馴れたおとなしい牡牛に身を変じ、彼女を背に海を渡ってクレータに連れて行った。そこでゼウスは彼女と床をとにし、女はミーノース、サルペードーン、ラダマンテウスを生んだ。<sup>7)</sup>

ゼウスは古代ギリシアの神々の最高神とされ、パンテオンの最高峰に位置する神である。この神が人間の姿でイメージされていたことは古代ギリシアの壺絵、レリーフなどから明らかである。上記の神話は、そういう神が牡牛に変身して人間の女性と結婚して子を残すというものである。エウローペーは、ポセイドーンの子アゲーノールの娘でフェニキアで生まれたという。エウローペーはゼウスの子を産んだ後、クレータ人の支配者アステリオスの妻となった。ゼウスとエウローペーとの間の子供たちは人間であり、アステリオスは、養育され、やがて、この子供たちの一人であるミーノースは、クレータの王となる。上記の神話は、クレータ王家と「牛」との深い関係を語るものであったのだろう。それは次の神話にもうかがえる。

⑤ 海神の牡牛とパーシパエー

ミーノースはクレータの王となろうと欲したが反対された。そこで彼は神々よりこの王国を授けられたものであると称して、その証拠として何事であれ彼の願うことは遂げられると言った。そしてポセイドーンに犠牲を捧げつつ、海底より牡牛の現われんことを祈り、現われた牡牛を神に捧げることを

約束した。ポセイドーンは彼に見事な牡牛を（海底より）送ったので、彼は王国を獲得したが、その牡牛は自分の飼っている牛の群にやり、別の牛を犠牲に供した。彼は海上の支配権を最初に握ったので、ほとんどあらゆる島々を統治下に置いた。ポセイドーンは彼が例の牡牛を犠牲に供しなかったので、憤り、この牡牛を猛悪にし、パーシパエー（ミーノースの妻）がこれに対して欲情を抱くように企んだ。彼女は牡牛に恋し、殺人の罪でアテーナイより追放せられた工匠ダイダロスを共謀者とした。彼は車のついた木製の牝牛を製作し、これを取って内部を空洞にし、牝牛を剥いでその皮を縫いつけ、かの牡牛が常に草をはんでいる牧場におき、パーシパエーをその中に入れた。牡牛がやって来て、真の牝牛と違って交わった。そこで彼女はアステリオス、一名ミーノータウロスを生んだ。彼は顔は牡牛であったが、他の部分は人間であった。<sup>⑦</sup>

この神話では、王妃パーシパエーの相手は海神ポセイドーンの贈った牡牛である。そして婚姻の結果誕生した子は、牛頭人身の怪物、ミーノータウロスであった。日本、アジアの異類婚の結果生まれる子は、ほとんどの場合人間の姿で、しかも普通の人間よりも優れている例が多いのに対して、対照的な例といえる。

しかし、この神話の話型は、その骨格において、インドの王即位の儀式アシュヴァメーダ<sup>⑧</sup>に酷似している。アシュヴァメーダでは、王妃は犠牲の馬と婚姻の儀式を行う。王は王妃を通して馬と結合し、馬の豊饒性をその身に帯びると考えられる。ここでも、王妃パーシパエーは海神から贈られた牛と婚姻する。王ミーノースは、明記はされていないが、王妃を通して牛と結合しており、王と王妃の子供はミーノータウロスとは兄弟の関係となる。

この物語は、海神との約束を違えた王が、その報いとして王妃が牛と忌まわしい婚姻を結び、恐ろしい怪物を誕生させたという語り口で語られているが、元来はインドやアイルランドの例と同様に、王権と牛との神聖な結びつきを語るものではなかったかと考えられる。また、④のゼウスとエウローペーの婚姻も、クレータの支配者アステリオスがエウローペーを通して牛と結合する物語と読むことができる。牛は、馬と同じく、ギリシアにおいては豊饒の象徴でもあった。④と⑤の話は、もともとクレータの王家が牛と深い関係を持っていたために紡ぎ出された物語であったのであろう。

牛の重要性は、次に挙げる例からも明白である。

#### ⑥ゼウスとイーオー

・「ゼウスは、ヘーラーの祭官の職にあった彼女（イーオー）を犯した。ヘーラーに発見されてゼウスは少女に触れて白色の牝牛に変じ、彼女と交わったことはないと言った。」<sup>⑨</sup>  
これに気づいたヘーラーがイーオーをさまざまに苦しめるが、イーオーはついにエジプトに逃れ、ナイル河辺において一子エパポスを生んだ。

カール・ケレーニイは、「これこそエジプトの神牛アーピスに他ならない、と言われている。また、イーオーはエジプト人の女神イーシスに似ているともいわれる。この大いなる女神は三色の牝牛に変身したともいう。」<sup>⑩</sup>と言う。牛に変身したイーオーと、エジプトの大女神イーシスは、このように関連付けられており、両者とも牛と深いつながりがあると考えられていた。

ゼウスは、また、白鳥の姿でも人間の女性との婚姻を結んでいる。

⑦ゼウスとリーダー

ゼウスは白鳥の姿となってリーダーと、また同じ夜にテュンダレオースが、交わって、ゼウスからはポリユデウケースとヘレネーが、テュンダレオースからはカストールが生まれた。<sup>①</sup>リーダーはもともとスパルタの王テュンダレオースの王妃であり、彼との間にはすでに子供もあつたが、ある夜、白鳥の姿に変じたゼウスに抱擁されて卵を生み、ここからポリユデウケースとヘレネーが生まれたという。(このヘレネーは、後に世界一の美女といわれ、トロイヤ戦争の一因となった女性である。)実は②、④、⑤の例と同様にここでも、王が王妃を通じて動物(神)と結合する物語が語られている。スパルタ王テュンダレオースは妻リーダーを通して白鳥(ゼウス)と繋がり、その力を取り込んでいる。テュンダレオースの子は、この神の子と兄弟ということになる。動物の姿に変身して、婚姻を果たすのはゼウスばかりではない。ゼウスの兄弟で海の神、ポセイドーンもまたいくつかの異類婚姻物語を持つ。

⑧ポセイドーンとテオパネー<sup>②</sup>

美しいテオパネーは多くの求婚者につきまとわれたが、ポセイドーンは彼女を奪って、おそらく「牡羊の島」の意味の名をもつある島に連れていった。いずれにもせよ、その物語はさらに、ポセイドーンが花嫁を羊に変え、自らは牡羊に変身した、と伝えている。いやそればかりか、彼はその島の住人たちまでも羊に変えてしまった。こうして二人は求婚者たちがあとを追ってきたときには、身を隠していることができた。こうしてポセイドーンは牡羊の結婚をおこなったのだが、そこからあのプリクソスをコルクス島に連れてゆき、アルゴナ

イタイの航海を惹き起こす因となった黄金羊皮の牡羊が生じたわけである。

テオパネーはマケドニア王の娘、すなわちマケドニアの王女であつた。この王女とポセイドーンはともに羊に変身して結婚した。この結婚で生まれたのは、黄金の羊毛を持つ羊であつたという。この羊の羊毛は、後のアルゴ船の遠征の目的となつたのである。これは、おそらくマケドニア王家と海神ポセイドーン：羊とのつながりの起源を説く神話であると言える。また、ポセイドーンは馬にも変身している。

⑨ポセイドーンとデーメーター

ポセイドーンが恋の欲望をいだいて彼女のあとをつけはじめたとき、デーメーターはすでに彼女の奪われた娘ペルセポネーを探しに出かけた途中だつた、といわれる。女神は牝馬に姿を変え、オンキオス王の所有する馬が草を食んでいるなかにまぎれこんだ。ポセイドーンはここまかしに気づき、牡馬の姿となってデーメーターと交わつた。(中略)彼女はポセイドーンとのあいだに一人の娘を生んだが、その名は密儀の外部では言うことを許されていなかった。また彼女は黒いたてがみを有する有名な馬アリーオーン、またはエリーオーンを生んだ。黒いたてがみはポセイドーンから享けたものである。<sup>③</sup>

ポセイドーンは、馬とつながりの深い神であり、ギリシア神話には、最初の馬はポセイドーンより生まれたとする伝説もいくつかある。デーメーターは、大地および大地からの収穫を司る女神であり、人間ではない。しかし、動物の姿に変身して婚姻にお

よぶという話型がギリシア神話の異類婚のものと同じであるため、ここに挙げておく。

ギリシア神話において半人半馬の姿で語られるケンタウロイについても言及しておきたい。

#### ⑩ ケンタウロイ

ケンタウロイ—上半身は人間の姿で、下半身は四脚の馬の生物。古くは人間の全身の後ろに、馬の胴と後脚や尾の付いた姿で表される。生肉を食し、性格は荒々しく鬪争を好むとされていた。ところが、これは、異類婚の結果生まれたわけではなく、イクシオンという男の子孫であるとされている。

イクシオンは、誓約に背いたばかりでなく義父となる男を惨殺した男である。これによって誰にも顧みられなくなった彼を憐れんで、ゼウスが罪を潔め、彼の心を癒してやったところ、今度はゼウスの妻ヘーラーに思いをかけ、邪な嘘までついてゼウスとヘーラーを辱めた。ゼウスとヘーラーは彼を懲らしめるために、雲を女神の姿にして彼に与えた。この雲とイクシオンが交わって生まれたのが、ケンタウロイの祖であるケンタウロスであるという。

ただ、ケンタウロイの中でもケイローンは違う生まれと、性質を与えられていた。彼はゼウスの父神クロノスと女神ピリュラーの子であった。母親であるピリュラーが牝馬となって受胎したために半人半馬の姿となったという。彼は不死であり、賢く心の優しい神であり、また医術に長じ、薬草を栽培して多くの人を助けた。このようなどころから、彼はギリシア神話の何人かの英雄や神の養育者でもあった<sup>⑤</sup>。

同じ半人半馬の姿でも、その性質によって異なる生まれとされ

ていることが興味深い。荒々しく鬪争を好む性格のケンタウロイは、獣のような人間が誕生せしめたものであり、賢く心優しいケイローンは、神の子であるが、神が受胎時に馬の姿であったためにその姿を与えられたという。

ここには、留意すべき示唆がある。それは、本来形のない人間の獣性は時として目に見える形をその子孫に残すという考え方が見られること、そして、親の婚姻時の姿（本体の姿はともかく）が生まれてくる子供の姿に深い影響を与えるという思想がここにも見えるということである。

これらの異類婚姻譚や異類婚姻の儀式を表にして考察してみたい。（表）参照

これら、インド、アイルランド、ギリシアの儀式、神話における異類婚姻のモチーフは、その形態において、日本、朝鮮半島、中国を中心とするアジアの異類婚姻譚とは大きく異なることがわかる。アジアの異類婚姻譚では、例①の「蛙の奥方」のタイプのように、異類の本体は動物の形態であるが、婚姻時には人間の形に変身することが多い。また、婚姻の結果生まれる子供は、一族の始祖や王者、支配者となることが多い<sup>⑥</sup>。しかし、印欧の異類婚姻譚では、異類の本体は多くは人間の形でイメージされている神であるが、婚姻時には動物に変身する。これは、アジアの例とちょうど反対の形を取っている。また、生まれる子供は、例①、④、⑦を除いて動物の形をとる。これもまた、アジアの例と逆の現象であると言える。

印欧の異類婚姻のモチーフで、特徴的なパターンが、例②のアシヴァメーダに見られる、王妃と異類との婚姻であろう。王の妻の立場の女性が多くは動物の形を取る異類と婚姻する話型は、先にも述べたとおり、王が王妃を通じて異類とつながりを持つこ

〔表〕

| ⑩                   | ⑨               | ⑧             | ⑦             | ⑥                   | ⑤                  | ④                 | ③    | ②          | ①            | 例    |      |
|---------------------|-----------------|---------------|---------------|---------------------|--------------------|-------------------|------|------------|--------------|------|------|
|                     | 神<br>(ポセイドーン)   | 神<br>(ポセイドーン) | 神<br>(ゼウス)    | 神<br>(ゼウス)          | 神牛                 | 神<br>(ゼウス)        |      | 馬          |              | 男    | 異類本体 |
| 女神<br>(ピリュラー)       |                 |               |               |                     |                    |                   | 馬    |            | 蛙<br>(蛙王の娘)  | 女    |      |
| 人(?)                | 馬               | 牡牛            | 白鳥            | 人(神)<br>(二説に雲)      | 牛                  | 牡牛                | 馬    | 馬<br>(殺害後) | 人            | 婚姻時  |      |
| 牝馬                  | 馬<br>(デーメーテール)  | 羊<br>(テオパネー)  | /             | ?                   | /                  | /                 | /    | /          | 人?           | 出産時  |      |
| 半人半馬<br>(ケイローン)     | 娘と馬<br>(アリーオーン) | 羊(金毛)         | 人<br>(ヘレネーほか) | 息子エパポス<br>(神牛アーピス?) | 半人半牛<br>(ミーノータウロス) | 人<br>(ミーノースほか)    | /    | /          | 人<br>(三人の息子) | 子    |      |
| 神<br>(クロノス)         | 女神<br>(デーメーテール) | 王女<br>(テオパネー) | 王妃<br>(レーダー)  | 少女<br>(イーオー)        | 王妃                 | 少女<br>(エウローペー)    | 王    | 王妃         | 王            | 婚姻相手 |      |
| 変身<br>ピリュラーは出産時に牝馬に | デーメーテールは馬に変身する  | テオパネーは羊に変身する  | レーダーはスパルタ王の妻  | イーオーは牝牛に変身する        | 王妃はクレータ王ミーノースの妻    | エウローペーはクレータ王の妻となる | 即位儀式 | 即位儀式       |              | 備考   |      |

とを意味していると考えられる。次の支配者となるべき王と王妃の子は、王妃と異類の子とは兄弟の関係となる。この形は、ほかに例④、⑤、⑦のギリシア神話にも明確に現われている。アジアの異類婚姻譚で、異類が王や支配者の親、祖先とされることに対してこれも対照的な現象と言える。

さらに、これは儀式であつて婚姻譚の範疇には入らないものであるが、例②のアシュヴァメーダと例③のアイルランドの王の即位式においては、王や王妃が馬と婚姻の儀式を行った後に、その馬を食する儀式が続く。これは、馬と人とが婚姻を通して結びついた後、人間がその馬を従え、馬を人の中に取り込むことを表現しているのであろう。

親となるものの婚姻時の形態が、生まれる子供の形態と密接に関連していることもまたこれらの例が如実に語るとおりである。本体が人間の形を取るものであつても、婚姻時の形が、多くの場合子供の形態を決定していると言える。これは、アジアの異類婚姻譚でも少数の例外を除いて同様に言えることである。婚姻時人間である場合、本体が異類(動物)であつても、子供は人間の形をとることがほとんどである。

異類婚姻の物語には、人間と人間を取り巻く自然の関わり方の思想があらわれている。それは、それぞれの文化や社会の発達段階によってさまざまな姿で発現しており、そこにその共同体の考え方を見ることができるといえる。その中には、結婚や出産といった人間生活の重要な営みに対する考え方もまたあらわれている。

このような婚姻の物語は、人間が、動物に代表される自然とどのように結びつき、また、これをどのように受容していくのかという思想の一端を表わしている。それは、人間は動物とは異なるものであるという自覚のもとに設定された物語であるとともに、

人間もまた自然の一部であり、この結びつきは人間にとってなくてはならないものであるという思想に裏打ちされた物語であつたと思う。

追記：小稿は、印欧語、印欧文化と呼ばれるものについて、その存否を含めて、論じるものではない。しかし、管見ではインドとヨーロッパを地理的に結ぶメソポタミアの神話に異類婚姻譚を見ることができず、結果としてインドとヨーロッパの神話と、それらの共通点について論じることになったことを申し添えておく。

#### 〔注〕

- (1) Karen-Armstrong "A Short History of Myth" (2005 Canongate Books Ltd, Edinburgh, Great Britain) より拙訳。
- (2) 上村勝彦『インド神話 マハーバーラタの神々』(二〇〇三年一月 ちくま学芸文庫) より
- (3) 注(1)より
- (4) 拙稿「日本上代の異類婚姻譚について」(「湘南短期大学紀要」第十五号 平成十六年三月)、および「東アジア古代の異類婚姻譚について」(「湘南短期大学紀要」第十六号 平成十七年三月) 参照

#### (5) 注(1)参照

(6) 鶴岡真弓・松村一男『図説 ケルトの歴史 文化・美術・神話を読む』(一九九九年八月 河出書房新社)

(7) アポロドーロス 高津春繁訳『ギリシア神話』(岩波文庫) より

(8) カール・ケレーニイ 高橋英夫訳『ギリシアの神話 神々



- (9) の時代』(一九七四年四月 中央公論社)  
呉 茂一『ギリシア神話』(昭和五十四年十一月 新潮文庫)  
より
- (10) 注(3) 拙稿参照。